

惑乱と歓喜と高野の奇跡：  
能<高野物狂>の「狂ひ」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/17453">http://hdl.handle.net/2297/17453</a>

# 惑乱と歡喜と高野の奇跡

——能〈高野物狂〉の「狂ひ」について——

## 高橋毅志

○はじめに

能〈高野物狂〉は、『三道』に名前の見える男物狂能である。そこで本作は「新作の本体」とされており、作書上重要な作品として位置づけられていたようだ。しかし現在では本作に焦点を絞った研究が少なく、舞台で上演される機会も多くない。そこで私は、本作における「狂ひ」という要素に着目し、本作の中で「狂ひ」がどのような効果を上げているのか考察を試みた。詞章の引用は『室町時代謡曲集』所収の観世文庫蔵本による〈高野物狂〉である。

### 一 〈高野物狂〉における二つの「狂ひ」

——シテの「狂ひ」の分析的考察——

本章では、〈高野物狂〉のシテたかしの四郎の「狂ひ」について考察する。本作には「狂」に類する語が十三例ある。まずはこれを列挙してみる。

- ① さそわれて 花の行を尋つ、 風きやうしたる心かな
- ② 猶わかしゆくん恋しやと いふ山松のはり道を いさやくる  
いのほらん いさくくるいのほらん
- ③ あるひハ念仏 せうミやうのこゑく あるひハふせうれいの  
こゑ 耳にそミ心すミて 物狂のく るひさむる心の
- ④ 是ハはうかにて候 哥をうたひ舞をまい ほうらつしたるく  
るひ物にて候よ
- ⑤ さやうに狂う物ならハ 此高野山の内にハかなふまし
- ⑥ いつもときハの さんこの松かけに 立よる春の 風きやう  
したる物くるひく
- ⑦ あら忘や 高野の内にてハ うたひくるハぬ御せいかいを  
忘れてくるひたり
- ⑧ 是なる物狂を能々みれハ 古郷にと、めをきたるめのとにて  
候
- ⑨ 本より誠の狂気ならず 主君の為なれハ

これらを見ると、「狂」にはらまれている意味が一定ではな

いことが分かる。本章ではこれらの表現を整理しつつそれぞれの性格を考察する。

実際に考察に移る前に、その方法を大まかに記しておく。考察は前掲の一覧表に従い、その番号順に考察する。ただし、能作品の構成などとの関係でまとめて考察する場合はその都度注記する。また考察する内容としては、a.「狂」にまつわる表現と前後の詞章との関係、b.その他関連事項、c.当該の「狂」が何を意味しているか、とする。

### ○狂い登るシテ — ①、②の考察 —

まずは①。この表現はシテが高野山へとたどり着くまでの道行文にある。道行には②も含まれているので、①と②を同時に考察していきたい。

a.

道行文全体に渡って、「君」や「主君」といった語が多用されている。この「君」が指しているの言うまでもなく子方・春満であり、道行には子方を指す語が計七つある。これらの表現から、シテが子方を主君として認識していることが読みとれる。ただ「花」という表現が例外的なのだが、こちらは別の意味で重要だと思うので後に考察する。

シテは蘇武の故事になぞらえながら、手許に残った文に寄せて子方を慕う気持ちを語っている。何があっても「ちうきんの心」を忘れなかった蘇武に自らを重ね、再会の望みに焦がれているのだとい

える。ちなみに『三道』の放下の条には「古歌にても、名句などにもあれ」という記述がある。〈高野物狂〉においてこの記述に照応するのが蘇武の故事であり、これは後に〈花籠〉や〈砧〉などにも用いられる「耳近」な故事である。

かくして主君を捜す思いに囚われているシテだが、一方で、「うハの空なる」以下の詞章を見ると、シテはこの段階で子方がどこにいるのか全く知らない。再会を願う強い思いとは裏腹にその展望は暗く、シテの旅は絶望的な願いを抱えたあてのないものだといえるだろう。その旅路の途中、「よふことり」以下の部分に①の表現が出てくる。シテは「花」⇨子方を求めて思い乱れながら高野山にたどり着き、②の表現にあるように高野山へと「くるいのほ」る。ただし前述の通りシテは子方の行方に関して何の手がかりも持っていないのだから、高野山へ向かっていること自体は明確な目的意識に基づくものではない。

b.

演能上、「よふことり」の後にカケリの所作が入る。このことからシテの心の乱れはここがピークであるといえる。

c.

①と②の表現からは、子方の出奔に惑乱したシテの思いを看取ることができるといえる。また、子方を主君と慕うシテの認識にも注意を払いたい。

○狂ひ覺むるシテ — ③の考察 —

③の考察に移る。これは高野山にたどり着いたシテの最初の言葉である。

a.

ここでは、①や②の「狂」から大きく転換する。高野山に入つてすぐ、シテが「物狂のくるひさむる心」という心理状態に至るのだ。もちろん再会を渴望する思いから完全に解放されたわけではないが、先ほどまで「あらおほかの御身の行なやな」と歎いていたのに比べれば、惑乱や絶望といった形容は似つかわしくない。「くるひさむる」ことよつて心にゆとりが生まれ、主君との再会にいくらか前向きになりながらしばしの休息を取るのであらう。

また、「物狂」という表現は、シテの自己認識の直接的な表れである。この表現にも注意を払っておきたい。

b.

シテはここで「立よりてやすまん」と語っている。つまりしばしの休息を取るくらいの意識であり、ここでの再会を全く予見していないと言える。

c.

まず「物狂」という表現は、シテの自分自身に対する認識である。と同時に、自分は物狂だという認識を持ち得るまでに落ち着いているということも読みとれる。高野山に入つたことでシテの惑乱は沈静化し、「狂ひ」も含めて自分を省察できるようになっている。

次に「くるひ」という表現は、道行で語られたような内的苦悩を指していると考えられる。その後「さむる」という言葉が続いていることから、歌舞の意味合いは含まないだろう。よつて②よりは①に近い意味合いを持つていると言える。

これらのことを総合すると、「物狂のくるひさむる心」という表現の意味が見えてくる。これはシテが自分自身をかなり客観的に把握した表現であつて、①や②のような即自的な表現とは大きく異なつてゐる。またその心理状態も、惑乱の真つ只中にある状態とそれが一時覚めてゐる状態、という相違がある。つまり入山の詞章は、直前に置かれた道行の詞章と内容上鮮やかな対比をなしているのだ。中でも③として引用した箇所には清澄かつ不可思議な高野山の靈威がシテの体験した感覚として端的に示されているといえるだろう。

○狂ひ覺めても「はうか」 — ④、⑤の考察 —

続いて④を考察する。これはシテとワキ僧との「問答」に出る表現だが、⑤もこの「問答」に含まれている。よつて④、⑤を併せて考察する。

a.

シテの様子は、ワキ僧によつて「いきやうなるふせい」と指摘されている。これに対しシテは「能御覽せられて候」と応じ、反発する素振りはない。またシテ自身は、自らを「はうか」と称している。先ほどの「物狂」という表現との相違が気になるところだ。また続けて④「哥をうたひ舞をまい ほうらつしたるくるひ物にて候よ」

とあるが、これは「ほうか」と名のつたことの補足だと考えられる。

シテの名乗りを承けて、ワキ僧は⑤のように高野山から出ていくことを勧める。ここでワキが制戒に触れると述べているのは、「うたをうたひ舞をまひ 笛つ、みをならす事」である。このワキの発言に対し、シテは大いに反発する。その際ワキに訴えているのは、「人を尋て此山にのほりたる」という自らの旅の動機である。

b. 後半には子方を捜していることが語られる。だが、道行の詞章に見られたような惑乱はない。それどころか自身を弘法大師と重ね合わせつつ旅の目的を語るなど、論理性と機知に富んだ言葉が並んでいる。

c. シテの様子や補足的な表現に基づけば、④の表現における「くるひ物」は、放下的な振舞いをする人間という意味だろう。⑤の「狂う」は、ワキが直前のシテの説明を「さやうに」で承けていることからしても、シテの説明を何の疑問もなく受け取り鸚鵡返しにしたものであろう。ゆえに⑤は、「ほうらつ」をするのなら高野山には居られないぞ、という素朴な対応だといえる。

ところで、この箇所以前の「狂ひ」という表現には、基本的にシテの内的苦悩の意味合いをはらんでいた。しかしここではそういった側面が鳴りをひそめており、シテは自らの行為的な(≡表面的な)「狂ひ」についてワキに説明している。またここで、シテが高野山へたどり着くまでの間に「ほうか」となっていたことが分かる。これらの要素については後に論じる。

以上のように、ここでもシテは内面の苦悩を顕在化させていない。シテはこの「問答」の中で自らを「くるひ物」と語るが、主君の話をする際に惑乱の相を呈することはない。また「狂」にまつわる語で主君探しへの想いを語ることもない。これは③の「くるひさむる」状態が続いているからだと考えよう。そしてその代わりに比重が増しているのが、「入定まれるたかの山」以下の高野山と大師への讃歎である。この変化についても後に考察したい。

### ○狂い覚むる奇跡の讃歎 — ⑥、⑦の考察 —

⑥はどうだろうか。この表現があるのは中ノ舞が終わった後である。さらに⑦が⑥に直続しているので、この二つを同時に検討する。ただし、中ノ舞の前には曲舞が置かれており、こちらも高野山を讃える内容となっている。この点を考慮に入れつつ考察を進める。

a. ⑥に含まれる「風きやうしたる」は①と同じ表現である。だがそれを語るシテの状況は、「くるひさむる」経験によって大きく変わった。その点をよく踏まえて考察する必要があるだろう。

⑥でシテは三鉢の松にあって舞を舞っている。また語り舞の内容を見てみると、クリ・サシで高野山および三鉢の松のいわれを語り、クセで高野山を「しつかなるれいち」として讃えるというものである。この曲舞の素材に関しては、重田みち氏によるすぐれた先行研究がある。またこの辺りの詞章を見ると、シテは高野山の景物を讃歎しつつ歌い舞っているようだが、「物くるひ」というフレーズ

を口にしたとたん制裁に触れた事に気づく。ここで⑦が入り、シテは「高野の内にてハ、うたひくるハぬ御せいかいを 忘れて」いた、と反省してワキに詫言っている。

これらの詞章は重田氏の指摘にあるとおり、高野山を讃歎する内容で統一されている。だが、それは同時に、道行の詞章にあつたようなシテの内面的苦悩が表出していないということでもある。これは「問答」の特徴と共通する。

b. 道行の段に組み込まれていたカケリの所作はこちらにはない。

c. この箇所も「物狂のくるひさむる心」が続いていると判断できる材料が多い。よつて⑥の「風きやうしたる」は、舞事という「狂」を演じて見せていることを指すと考えられる。だが、入山前の惱乱からは一時覚めていた以上、シテが舞事に及んだ動機は別に考えなければならぬ。今シテを突き動かしているのは高野山の深く静かな靈威であり、それに「くるひさ」まされた彼自身の感動であるといえるだろう。ゆえに⑥にある「物狂」という表現も入山前の惱乱を含むとは考えがたく、苦悩から離れて高野讚歎の思いを全力で演じているシテの形容だと見るべきである。①との比較でいえば、苦悩や惑乱というよりは、歓喜による興奮状態を指す「物狂」なのではないか。

⑦は、全体としてはシテが思いに任せて舞にまで及んだことを反省する言葉である。と同時に、シテが高揚状態から覚めたことを示す役割をも果たしているといえる。

### ○ 子方の気づき — ⑧の考察 —

次に⑧を考察する。これは⑦の直後、子方のセリフの中にある。

a. 子方はシテを見て、まず「物狂」と呼び次に「めのと」と呼ぶ。シテも子方に気づき、「あれにましますハ主君春満御せんか」と語りかけている。一方シテは、子方を主君・春光と認めた後「何とて御供にハめしくせられ候ハさりしそ あら御情なや候」とかきくどいている。

b. 遁世後の子方がシテの状況を知り得たという記述はない。ゆえに子方がシテの惑乱を知っていたとは考えられない。

ところで、本作は江戸時代に大きな改作が施された。いわゆる明和改正謡本である。そちらで子方がいつシテの正体に気づくのかを確認してみると、シテが高野山へと登ってきて子方やワキ僧と遭遇したところすでに気づいていた。

c. ⑧の「物狂」という表現は、先ほどまで歌い狂っていたシテの状態を指すと考えていいだろう。

### ○ 「狂気」と「本より」の交差 — ⑨の考察 —

ここでは本作最後の「狂」にまつわる表現、⑨を検討したい。た

だし、この⑨の表現には確定的な解釈を下しがたい。その難しさも含めて⑨を論じていく。

a.

まず、このみ「狂気」という表現になっていることが最大の特徴である。『謡曲二百五十番集索引』で「狂気」の語を引くと、七作品から九つの用例が見つかる。それらを大まかに分類してみると、使われる対象の内面と関係なく、異常な状態のみを指して、「発狂している」といった一般的な意味合いで用いられるもの

・物狂の本人に対して、そこに何らかの原因や根拠を予見しながらその内容はまだ不分明な状況で用いられるもの

・狂乱の核心が語られた後、思いの内容とその表現方法たる所作の両方にまたがって用いられるもの

となる。ここから類型的に「狂気」の持つ役割を考えてみよう。

周囲の理解が浅い段階で、一般的な狂人としての意味合いでこの語がシテに用いられると、シテは憤慨し自分がただの狂人ではないことを語ろうとする。それらが語られた後に「狂気」という言葉が用いられれば、当然にもそこには思ひ故の物狂としての重さが加わっている。それはシテが単なる狂人ではない、「物狂」であることの指標である。つまり、物狂能における「狂気」の語には、筋の展開と深く結びついて物狂としての内面性を引き出す役割があるのではないだろうか。

次にさらなる解釈上の困難をもたらすのが「誠の狂気ならず」という表現だ。本作の詞章には、シテの「狂ひ」に関して「誠」と対を為すような表現が見出せないからである。あえてそういった要素

を挙げるならば、冒頭の偈文や「問答」などで秀れた知性がいま見られる点だろうか。実際「問答」におけるシテの反論は理路整然としているし、知識もさることながら弁舌においては僧であるワキをも凌いでいるようだ。これらがシテの「本より」の姿の一端なのかも知れない。

最後に、自身を「物くるひ」と呼んでいたシテは、いつの間に「狂気なら」ざる状態に至ったのだろうか。これも気になる点である。この観点から興味深い作品に〈三井寺〉がある。〈三井寺〉の結末の段に「なふ是は物には狂はぬものを、物に狂ふも別れ故、逢ふ時は何しに狂ひ候べき」という詞章があり、ここでシテは物狂状態から開放されたことを強調している。ちなみにシテが子方との再会を認識したのは、これより一つ前のシテの台詞「あら不思議や、今の物仰せられつるは、まさしく我子の千満殿でござめれ あらめづらしや候」である。つまり、再会を認識した直後に狂人ではなくなつたことを宣言しているのだ。

〈三井寺〉に依るならば、物狂という状態は時間をかけてゆつくりと落ち着いていくものではない。狂人から常人へと一瞬の転換がなされるのである。そして〈三井寺〉での転換点はシテが子方を我が子と認めたことであつた。これを〈高野物狂〉にも適用するならば、〈高野物狂〉のシテもまた、⑨の時点ですでに物狂とは呼べない存在となつていてはないか。

b.

⑧までで検討してきたとおり、シテを歌舞へと駆り立てているのは悩乱ではなく歓喜である。この歓喜という内的衝動のみを指して

「狂」に類する表現をとっている箇所はなかった。

c.

ここまでの考察を踏まえて、⑨についてさしあたっての結論を示してみよう。

⑨は、シテが物狂ではなくなったことを示しているのではないだろうか。シテは元々「うたひくる」う人間であったわけではない。彼の苦悩も放下の歌舞も子方を失ったことによって培われたものなのである。そして〈三井寺〉に従えば、シテはこの時点で物狂の思いつから解放されていると思われる。⑨は、そのことを断る性質のものだと考えられないだろうか。

以上見てきたように、シテは悩乱を表出する方法としての「狂ひ」も持っているが、それ以外の感情の高まり（例えば歓喜）も歌舞という「狂ひ」で表現している。そして彼は物狂であり、かつ放下でもある。となれば本作の「狂ひ」は、もはや職業とも狂態とも割り切れない。シテという一個人の構成要素ともいえるべき特徴を持つているといわねばならない。

## 二 「狂ひ」はなぜ必要か ―能の展開と「狂ひ」の役割―

前章では個々の「狂ひ」の要素が持つ意味内容を詳しく考察した。とりわけ惑乱と歓喜という二極的な心理が「狂ひ」という要素でくくられていることは興味深い。この点を踏まえて第二章では、それ

らが〈高野物狂〉という能作品の展開にとってどのような意味を持っているのか、という角度から考察を加えてみようと思う。はじめにシテの「狂ひ」の二極である惑乱と歓喜の関係性について、次に作品の結末でシテが子方とともに出家することの意味について、それぞれ論じていく。

## ○二つの「狂ひ」は矛盾するか ―惑乱と歓喜と高野の奇跡―

①・②の考察で論じた入山前のシテの謡と⑥・⑦で論じた三鈴の松での舞事は、その内容上異質のものだと論じてきた。この点に關して、「二体シテの内的『狂ひ』はどこへ行つたのか」「入山前の詞章と三鈴の松での詞章は、分裂的なのではないか」という問題が生じる。私はこの問題について、両者は密接不可分の関係にあると考える。

シテの旅が主君との再会を願つてのものであること、その再会が何ら見込みのないものであることは前節で述べた。では、なぜシテはそんな絶望的な旅へと赴いたのだろうか。何が彼をこの「風きやうしたる心」の旅へと駆り立てたのだろうか。

そもそもこの旅のきっかけとなったのは子方の出奔であった。その際のシテの思ひは、文の段直後に表れている。その箇所を以下に引用する。

わか木の花をさきたて、身のなるはてはいかならん  
うらめしの御事や / たとひ世を捨てまふとも 三世の道の末

あらハ いくくまでも御供に なんとや友なひたまハぬぞ 今ハ  
ちり行花よりも 頼木かけに嵐ふく 行ゑハいつく雲水の 跡  
をしたひていつくとも しらぬ道にそ出にける 〳〵

この箇所から、シテの子方に懸ける思いを読み解いてみたい。  
まずシテは、自分を置いて出家した子方をうらめしく思っている。  
しかし、「たとひ世を捨てたまふとも」とあることからわかるように、  
子方の出家そのものを否定しているのではない。出家に臨んで  
自分を伴ってくれなかつたことが、シテには疎まれるのである。

さらにもう一つ、「わか木の花をさきたて、」という表現に注目  
したい。「わか木の花」とは子方のことを指しているわけだが、そ  
れを含めてこの表現はシテの自己認識を示しており、彼は「主君を  
先立てて初めて『身のなる』のが私であるのに、この先どうすれば  
よいのか」と歎いている。ここから読みとれるのは、子方が出奔し  
たことで先立てるべき花を失い、自身の行く末までも見失いかけて  
いるシテの姿である。

さらに付随して、引用の後半「今ハちり行花よりも 頼木かけに  
嵐ふく」という箇所を見てみたい。ここでシテは自らを花守になぞ  
らえており、これによって子方とシテとの関係が

子方―主君―花

シテ―傳―花守

という対照関係をなす。

これらのことを総合すると、以下のようなことが言えるのではな  
いだろうか。  
シテは子方を養育すべき傳の立場にあるわけだが、実際のところ

それは「シテが子方を守り育てる」といった一方的な関係ではない  
のだ。

シテは「去年の秋」に元の主君・平松殿を失った。その平松殿か  
ら託されたのが子方⇨春満であるわけだが、再三述べてきたように  
シテは今春満を新たな主君として認識している。つまりシテは作中  
一貫して「主―従の従」的な位置に自らを置こうとしているのであ  
り、これが「花を先立てる」という在りようの内実、だといえる。思  
うに、ここにこそ大の男がすべてを擲って物狂の旅に出る根拠があ  
るのではないだろうか。花守は花がなければ花守たりえないように、  
シテの実存は主君としての子方の存在に依りかかっているのである。

さて、こう論を進めると、「実存の危機に関わるほどの『狂  
ひ』がそうやすやすと『覚』めてしまつてよいのか」という問題が  
残る。これについても少し言及しておきたい。ここでは「立のほる  
雲路の」から「風たちよりてやすまん」までの、シテが高野山へと  
登りはじめたときの詞章を検討する。

ここで「物狂のくるひさむる心」という表現が確認できるのは、  
ほぼ中間くらいである。ただ、シテが高野山の霊力を感じたと判断  
できるのは「たうとやな」という表現であろう。これは「たかの山  
にきてみれハ」という表現に直続している。もつといえは、シテは  
道行の箇所でも「是やたかの、山ふかミ しけミの木かけ分行は  
爰そつくはの山やらんと わか方を思出の」と語り、特別な雰囲気  
を感じている。これらのことから、シテは「きの関越」えた辺りでは  
既に高野山の霊威に影響されていると言える。

それともう一つ、曲舞の詞章において語られる高野讚歎の内容をより詳しく見てみたい。ここで高野山を讚える文句を拾っていくと、シテがとりわけ「静けさ」を讚えていることが分かる。また人里から離れていることの形容も多く、さらにクリの冒頭で「きやう里はなれてむにんしやう」とある辺りからは、山深いことと静けさとが互いに結び付いているともいえるだろう。かくして曲舞の主眼である高野讚歎は、その深き静けさが大きな柱となっているのである（もう一つの柱が「我ほう成就まんまんのち」としての高野山賛美であるのはいうまでもないが、こちらの要素はさしあたり置いておく）。

このようにシテが高野山の静けさを尊ぶのは、彼自身の「くるひさむる」経験が鮮烈だったからだと言えないだろうか。シテは自らの存在基盤をも脅かす事態に思い乱れていた。ところが「さの閑越」えた辺りで、シテは不思議な雰囲気に引き寄せられる。そして高野山の奥地・三鉢の松へと到る道を上っていくうちに、彼を苦しめていた「狂ひ」はなぜか鎮まってしまった。しかもシテ自身はこれを予期していたわけではない。「くるひさむる」経験の全ては、彼の意志とは全く無関係にもたらされた、まさに奇跡的な僥倖だったのである。そして、奇跡という言葉でしか説明できない所に「くるひさむる」経験の最大の価値がある。物狂であるシテにとっては、それこそ最も讚歎すべき高野の靈験なのだ。だからこそシテの曲舞は、その深く静かなることを謳う内容となったのである。シテの讚える高野山の静けさには、シテ自身が体感した「くるひさむる」心が反映していると考えるべきであろう。

以上のことからして、シテ入山前の苦悩の所作と三鉢の松での舞事は決して分裂的ではない。確かにこの二つの見せ場は内容上全く異質だが、両者はシテの体験した高野山の奇跡によって矛盾無く説明できるのである。それどころか、シテの入山前の苦悩が深ければ深いほど、三鉢の松での高野讚歎の思いが強くなるとさえいえる。このような意味において、これら二つの「狂ひ」は分ちちがたく結び付いているのであって、高野讚歎というもう一つの主題とも響きあう重要な役割を果たしているのだ。

#### ○「狂ひ」ゆえの再会 — 物狂の旅は新たな出発を導く —

ここでは本作の結末に関して私なりの見解を示してみたい。

本作の結末でシテは無事に子方との再会を果たしている。さらにそのあとシテは子方に従って出家し、ともに修行の道に入っていくようだ。なぜシテは子方と再会できたのか、そして物狂の旅を経てこのような結末を迎えることには、果たしてどのような意味があるのだろうか。

この問題を考える上で、シテが作品を通じて何を経験し・どのような力を身につけたのか振り返ってみよう。

シテは自己の実存を脅かすほどの思い乱れた心を抱え、この旅を始めた。そしてその過程で放下的な歌舞が身につき、自身の苦悩や歓喜を表現する術となった。やがて高野山へたどり着き、入山を境に惑乱から解放される。この「くるひさむる」奇跡の経験から「狂

ひ」は大きく転換し、これ以降シテの歌舞は高野山を讃える方向へと加速していく。そしてその果てに、彼は子方と再会する。三鉢の松の下で会ったときには、二人ともお互いの正体に気がつかなかった（明和改正謡本の出現以降は会った瞬間に子方が気づく本が多くなるが、これはさしあたり考察から外す）。しかしシテの舞が終わったときにまず子方が気づき、続いてシテも子方を認識する。二人はここにおいて、真の意味での再会を果たしたといえるだろう。

これらのことを踏まえ、高野山における主従の再会について考察してみたい。

まず、再会の実現が高野山の霊力であるのかよく考えてみる必要がある。もちろん作品の筋は高野山の靈威に導かれるように展開している。だが結末の詞章には再会と高野山の霊力を結びつける記述がなく（明和改正謡本は例外）、むしろシテが子方に付き従う志を「実主従の道とかや」と讃えているのである。

これらのことから判断するに、本作の高野山は再会そのものをプレゼントしてくれているわけではないのか。高野山が与えた無償の奇跡は、再会の場である三鉢の松を提供すること、そしてシテの心を鎮めその力を引き出してやることまでである。では、主従の再会を実現させた原動力は何だったのだろうか。

それを私は、シテの高野讃歎の舞だと考える。なぜなら、シテの高野讃歎は見せ物的な芸能を超えているからである。シテの苦悩は絶望的に深く、その心理状態からの解放は、前述の通りこの上ない奇跡であった。これによってシテの信仰心はさらに高まり、最高の

放下の舞として結実した。その歌舞は、苦悩の深さと「くるひさむる」感動に裏打ちされた心からの讃歎だったはずである。

ところで、感情を歌舞に託すという技術は子方出奔以前のシテにはなかった要素である。シテは放下に身をやつし、絶望的な旅を続けていた。その中で彼は放下的な歌舞を身につけ、それが感情の表出方法にもなった。しかも常陸から高野山までの旅の中で自らの苦悩と向き合い、それを歌舞へと昇華し続けてきたのだから、苦しみの深さに比例して歌舞の力もまた磨き上げられていたはずである。

すなわち、主従の再会にとつて決定的なのは、シテの物狂の心と放下の歌舞の真価が発揮されたことなのではないだろうか。再会のチャンスは高野山が準備してくれたが、そこから先は、物狂の旅の中でシテが身につけた力量が試されなければならなかったのである。

○まとめ — 苦しみのエネルギーとしての「狂ひ」 —

本作における「狂ひ」とは、直接的にはシテの内面や所作などを指す表現である。そして同時に、それら直接的な意味合いを超え出る役割を果たしている。シテにとつての「狂ひ」とは、高野讃歎へとつながる苦しみのエネルギーである。それは元々、シテの実存を脅かすほどの苦しみだった。だがそれがいったん歓喜へと傾注されたときには、シテ自身の感動に即した放下の歌舞として発現した。そのエネルギーの強さによって、シテは更なる奇跡を手にする。それが子方との再会、すなわちシテの悲願の成就である。

そして主従の関係を取り戻したシテは物狂の狂乱と決別し、新

しい道を歩き出す。主君の望みに従って仏道修行の道へと入るのだ。冒頭からシテは信心深い人物として描かれていたが、絶望と奇跡を体験することによってさらに深い信仰心を手にしていたはずである。つまりシテは、人生の再出発を迎えるまでに大きな成長を成し遂げたのだ。かくして、物狂と放下の二側面を持ったシテの「狂ひ」の研鑽は、シテの新たな門出にとって必要不可欠だったといえる。仏法讚美を主題とし・高野山を舞台に・主人公たるシテのドラマが展開するへ高野物狂」という一つの作品を成立せしめているのは、ほかでもない「狂ひ」というファクターなのだ。

(1) 重田氏は平成十六年『観世』九月号に、作品研究へ高野物狂」という論文を寄せておられる。その中で氏は詳細な文献調査をし、それを踏まえて「完曲《高野物狂》のテーマと色調」として「蘇武の故事、仏法、大師信仰、霊地といった素材がテーマを織りなしている」と述べ、本作の作者が能全体に統一感を持たせるべく工夫を凝らしていることを指摘されている。

(2) この確認に用いた本は、金沢市立玉川図書館・近世史料館の稼堂文庫が所蔵する「明和二年林鐘出雲寺和泉椽本」である。この本は稼堂文庫の目録では「謡曲本」とされており、編著者名はない。